

MIS022-P02

会場: コンベンションホール

時間: 5月23日 14:00-16:30

カンタベリー堆積盆陸棚上のサイト U1354 (IODP Exp. 317) における鮮新 - 更新世の貝形虫化石 Plio-Pleistocene fossil ostracodes of continental shelf cores at IODP Site U1354 (Exp. 317), Canterbury Basin

楠 慧子^{1*}, 大井 剛志², 河潟 俊吾³, 石田 桂⁴, IODP Expedition 317 乗船研究者⁵

Satoko Kusunoki^{1*}, Takeshi Oi², Shungo Kawagata³, Katsura Ishida⁴, IODP Expedition 317 Shipboard Scientific Party⁵

¹ 信州大・院・工学系, ² 熊本大・院・自然科学, ³ 横浜国大・教育人間, ⁴ 信州大・理・地質科学, ⁵

¹Sci. and Tech., Shinshu Univ., ²Sci. and Tech., Kumamoto Univ., ³EdHS, Yokohama Natn. Univ., ⁴Geology, Shinshu Univ., ⁵

ニュージーランド南島カンタベリー沖で行われた IODP Exp. 317 では、世界的海水準変動と地域的な構造運動との相互関係を理解し、陸域縁辺の堆積サイクルプロセスを明らかにすることを目的として、陸棚 3 か所と陸棚斜面 1 か所の計 4 か所で掘削がおこなわれた。貝形虫は水深や水質などによって異なる生息場をもつ底生の微小甲殻類である。その群集変化は高時間分解能での古海洋環境変遷を明らかにする上で有用な指標となる。本研究では、Exp. 317 で掘削された陸棚上コアのうち、中間部に位置するサイト U1354 コア（全長約 375 m）の鮮新 - 更新統（Hole U1354B, C；深さ約 75-375 m；約 1.2 - 4.3 Ma）を対象に、貝形虫化石の群集変化から相対的海水準変動および古環境変遷を明らかにすることを目的として研究をおこなった。

全体的な傾向を把握するために、深さ 75 - 110 m で 1.5 - 2 万年間隔、110 m 以深において約 10 万年間隔で検討した 41 試料すべてから貝形虫化石が産出した。種数および密度（個体数 / 試料重量 (g)）はコアの上部に向かって増加する傾向にある。産出した貝形虫化石の中で、*Argilloecia* sp., *Callistocythere* sp., *Cytheropteron* cf. *abyssorum*, *Hemicytherura* sp., *Munseyella brevis* の 5 種が全試料を通して比較的多産する。このうちニュージーランド南島東沖の陸棚上に普遍的に生息する *Munseyella brevis* と、寒冷な深海に分布する *Argilloecia* sp. および南極に生息する *Cytheropteron* cf. *abyssorum* の相対割合 (%) ピークの対称的な変動がみられる。この変化から相対的海水準変動が示唆される。今後、群集構成をより明確にし、石灰質ナンノ化石などの生層序データを加えて議論することで、同域の古環境変遷史が明らかになることが期待される。

キーワード: IODP Exp. 317, カンタベリー堆積盆, 貝形虫化石, 鮮新-更新世

Keywords: IODP Exp. 317, Canterbury Basin, fossil Ostracode, Plio-Pleistocene